

ハイ・デザイン商品開発事業

- 木材と織物の組み合わせによるインテリア商品デザイン開発 -

佐藤 茂*

1. 緒言

市場における消費者の商品選択要因の中で、デザインや生活スタイルへのこだわり志向が消費者ニーズの多様化や個性化、高級化となって現れており、特にこの傾向は生活日用品に顕著である。

一方、地場産業や伝統産業といわれる業種では、これら生活日用品の生産に係わるものが多く、プロダクト・アウトからマーケット・インの発想の転換がますます重要になってきている。しかし、現状では地場産業の多くが、消費者ニーズに対処する手だてを持たないといった問題点を抱えており、その商品も非日常的な商品領域のものが多いといえる。したがって、地場産業の発展や生活化のためには、その地域の風土、素材、技術、人材、地理的条件、地域社会の文化性などの資源を生かしつつ、非日常的商品の生産から日常的商品の開発への転換を図ることが最重要課題と言える。

当研究は、地場産業が持つ資源、技術を生かし、消費者ニーズにあった高付加価値商品を開発を通して地場産業の開発能力を育成するため、高いデザイン力(感性)を持つ先駆的な核(コア)となる商品の開発を目的としている。

本年度は、木材と織物の組み合わせによるインテリア商品(夏障子)の試作開発を行った。

2. 内容

2.1 開発の背景

一般住宅においても建具が付かない建物はないと言われ、壁面全体からすればわずかな面積でもそのデザインがインテリアに与える影響は大きいと言える。しかし現代では、冷暖房の普及に伴い視線を遮るという建具本来の役割は薄れ、空間を仕切るという機能が重視されている。よって建具の多くは既製品となり、消費者の要求する商品が見当たらないという結果となっている。

最近の住宅事情を反映してか、買い替えの時期や流行の雰囲気に合わせて、ワンルームに住む独身においてもデザインが凝ったインテリア用品が単品ものでも嗜好されていると言う。よって建具においても消費ニーズやライフスタイルに合わせたデザイン開発が必要であると言える。

2.2 試作品の概要

夏障子は障子紙の代わりに簾(すだれ)を入れたものであり、季節感のある建具とされ、簾には伊代竹を磨いたものや萩等を編んだものが一般的である。本試作においては3mmに裂いた真竹に和紙(西の内)を巻き、それを横糸に見立て「緝」の技法で編み上げている。

紙自体に模様を付けて漉いた「紋美濃」や「紋障子」、胡粉で模様を付けた「紋典具」等、障子紙自体に飾り

を入れた従来の技法とは異なり、簾部位に藍染めした和紙の配置や組み合わせによって模様を創り出すという点に特徴がある。

製品スペック

建具：ヒバ

腰板：キリ(透かし彫)

簾：真竹に西の内和紙を巻き、綿糸で緝編み

3. 結果

試作品は大阪市インテック大阪で開催された「第23回関東甲信越静岡10県商品見本市」、茨城県立県民文化センターで開催された「平成7年度プライトいばらきデザイン展」に出展紹介し好評を得た。

今後は建具の他にスクリーンやタペストリー等バリエーションを広げ、商品化に向けて進めている。

なお、本試作に当たっては(株)紬の里、紙のさと、中山籠店、猪原桐材木工所、高岡木工所の協力を得た事をこの誌を借りてお礼申し上げます。

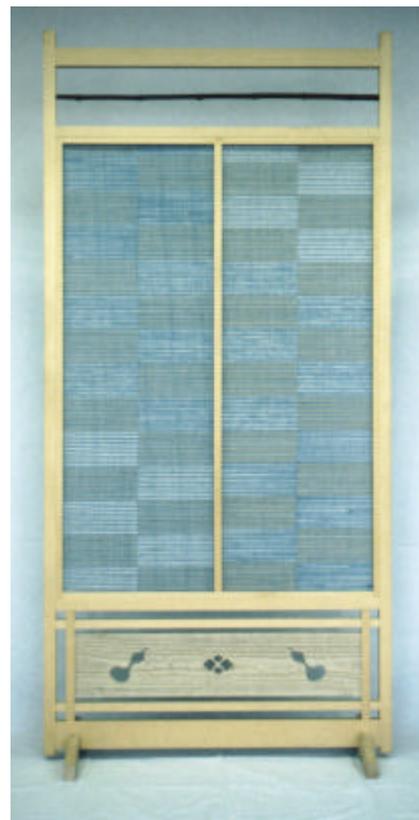


図1 夏障子試作品